



2022年8月26日

第70回日本PTA全国研究大会 特別第1分科会

「令和の日本型学校教育」を支援するPTA活動
～持続可能な社会の担い手の育成を目指して～

Vision&Education,Ltd.

代表取締役 木村貴志



□木村貴志 プロフィール



Vision&Education,Ltd.代表取締役。バッカーズ寺子屋塾長。バッカーズ九州寺子屋塾長。
小郡寺子屋「志学舎」塾長。

1962年、福岡県生まれ。企業勤務、高等学校教師などを経て、2006年に「志の教育を創る」を理念に Vision&Education,Ltd.を設立。代表取締役を務める。「志の教育」をテーマに全国各地で教育実践活動を展開中。

2005年よりバッカーズ・ファンデーション（会長 セコム株式会社最高顧問 飯田亮氏）の教育委員会事業「バッカーズ寺子屋」の教育プログラムを作り塾長を務める。2008年からはバッカーズ九州寺子屋（支援者の会会長 株式会社麻生 代表取締役会長 麻生泰氏）の塾長を務める。さらに2022年、福岡県小郡市の市政50周年を記念して、小郡寺子屋「志学舎」が設立され、塾長を務める。

現在3つの寺子屋の塾長として、次代を担う10歳から15歳の子供たちの育成に力を注いでいる。

また、「全ての人たちが志を持ち、生き活きと生きる社会の実現」を目指し、企業教育においても「志の教育」をテーマとした教育プログラムを、幅広い年齢層を対象に実施している。古今東西の歴史上の人物の生き方、現代を生きるビジネスパーソンの生き方、日本の自然・文化・歴史、国際社会の大きな変化などを踏まえた「志の教育」には多くの支持が集まる。

幼児教育の分野においても、教育理念に関する研修（クレド策定など職員向け）、親心の学び舎（保護者向け）を実施するなど、日本の教育をより良いものにするための教育実践に力を注ぐ。

著書に、『学び方が変わると人生が変わる』（粹書院）、『「志」の教科書』（産経新聞出版）などがある。

〔研修テーマ〕

- ・「今、求められる志の教育」・「先人の生き方に志を学ぶ」・「人物を創る教育」
- ・「プレゼンテーション～伝えることの本質～」・「親心を育む」

国際社会の中で日本人の弱点や欠点とされていることがいくつもある。「会議では意見を言わない」「集団の陰に隠れて矢面に立たない」「自分は安全な位置にいて批判・評論だけする」「チャレンジ精神に乏しく消極的」「意思決定が遅い」などだ。こうした資質は先天的なものではなく、子供の頃に受けた教育の中で身に付く仕組みが(教師の意図とは別に)知らぬ間にできているのではないか。日本人の素晴らしい点はもちろんたくさんある。だが気づかぬうちに「弱み」が育成されぬよう留意したい。

弱みの一つに、自分の考えを持たず、発言したがることがある。学校での学びには公平な評価が必要だ。だからテストがあり学ぶことには正解がある。その当然の前提が「知らないこと」「良くないこと」という意識をつくる。「そんなことも知らないの」とクラスメートや先生に笑われた経験は誰にでもあるだろう。その結果、「正しい答えは必ずあるものだ」「間違えたら無知をさらすことになり恥ずかしい」との意識が醸成され先生からの指名という危険をできるだけ回避したい心の習慣ができる。教師が指名すると「なんで私?」という顔をしたり、咄嗟に自分の後ろを振り向いて指名されたのは私ではなく後ろの人?というポーズをとるのは「指名されること」「嫌なこと」という意識があるからだ。導く意見を言つと笑われる危険性があるので「同じです」と

ものを言わぬ日本人から脱却を

■ 解答乱麻 ■



〈きむら・たかし〉Vision
Education Ltd.代表取締役。
バッカーズ九州寺子屋塾長。

バッカーズ寺子屋塾長 木村貴志

いう答え方は、授業でも学級会でも安全な答え方としてよく使われる。答えが間違っていて「みんなと同じ」である方が安全で心地よいのだ。こうした経験を小中高と積み重ねた結果、大人たちは講演や研修の場では、できるだけ後方の席からしか座らないようになる。指名される危険を回避する最善の方法だ。後ろの席から高みの見物をする習慣は、「ものは言わぬが勝ち」「当事者にならず評論する方が賢明」という心の習慣を次第に育む。

知らないことや問題が解けないことを恥ずかしがる一方で、「教えてもらっていないことはできなくて当然」「教えていない方が悪い」という思考回路も形成される。大人になってからの指示待ちの姿勢と失敗を恐れる姿勢につながり、企業研修での大きな課題となっている。国内外の会議でもだんまりを決め込み、自分の意見を持たず付和雷同する人たちは、会議後、決定されたことへの批判を仲間内で活発に意見交換し、フラストレーションを解消する。

決定されたプロジェクトが失敗しようものなら「だから言っただろう」と嘆いてみせる。これは子供が何かにチャレンジし、失敗した時に見せる大人の姿とも重なる。正解を前提とする生き方は、後付けの理由をたくさん生み出し、チャレンジを避ける状況をも生み出す。

こうした学びと生き方に対するPassiveな姿勢を如何にActiveなものに変革するかがこれからの教育の大きなテーマだ。集団の陰に隠れぬためには、「個の確立」が大切だ。それは、自分の考えと意志、判断力・決断力を持つことである。その土台として、勇氣、公正、公平といったプリンシプルや教養を身に付けることが大切だ。そのためには「聴く・読む・書く・話す」の4つの基礎的学びの奥深さと重要性を熟知した教育実践が必要だ。

プリンシプルや志の大切さを伝えていく教育において大きな力になるのは、やはり親や教師の現実への取り組み方、生き方である。教育改革の成否は大人の自己錬磨と生き方とにかかっている。

■ 「解答乱麻」はおわりませ

「バッカーズ九州寺子屋に入塾して」

私がバッカーズ九州寺子屋の1年間の学びを通して、変わったことや感じたこと、気づいたことは4つあります。

1つ目は、人の話を攻撃的に聞くようになったことです。バッカーズに入る前までは、ただ聞いているだけの時があれば、メモをしていても聞いたことをそのまま書くだけで、何も考えずに聞き流していました。話の内容について疑問に思うこともなく、質問することもできませんでした。しかし、このバッカーズに入塾して、攻撃的に話を聞くことやメモに自分が感じたことを書き込むことの大切さを知り、それを実践するようになりました。すると、その時に感じたことなどがメモを見返した時に思い出せて、攻撃的に話を聞くことで疑問が生まれ、積極的に質問ができるようになりました。また、メモをとることで自分の頭の中を整理することができ、感想文も自然に書けるようになりました。このようにメモをとると沢山の良いことがあります。そして、何回も講座を受けていくうちに、経営者講話などの前に下調べをすることの大切さに気づきました。事前にその企業のことなどを調べておくと、調べたことに関して質問をすることができます。このように、経営者講話の前に下調べをすることで、自分から調べる力がついたと思います。この力がついたことで、分からないことがあったら、すぐに誰かに聞いていた私が、インターネットや辞書などを使って、自分から調べるようになりました。メモを上手にまとめることや質問をすることが苦手だった私も攻撃的に話を聞くことによって、変わったと思います。

2つ目は、積極的に話すようになったことです。私は人前で話すことが苦手で、自分の考えや思いをうまく伝えることができていませんでした。しかし、バッカーズに入塾してからは、突然マイクがまわってきて、感じたことなどを話したり、スピーチコンテストなど大勢の人の前で話すことで、少しずつですが、自分の考えや思いをうまく言葉にして伝えられるようになりました。スピーチコンテストで準優勝が取れたことは、とてもうれしい思い出として残っています。少しずつですが、次の3つのこともできるようになりました。1つ目は、人と違うことが話せるようになったことです。最初の頃は、自分が思ったり感じたことならば、人と同じことでも話して良いと思っていました。しかし、「人と同じことばかり話していたら、周りの聞いている人達はつまらない」と塾長がおっしゃったのを聞いて、確かにそうだなと思い、人と同じことをなるべく話さないようにしようと、聞いてくれる人のことも考えて話すようになりました。2つ目は、柱を立てて話すことです。最初の頃はレポートやスピーチの構成文を書く時、柱を立てずに思いついたことをどんどん書いていました。そのため、文章の構成がバラバラでおかしな文章になっていました。しかし、塾長から文章を書く前に文の構成、柱を立ててから書くと良いことを教わり、それを実践するようになりました。最初のうちは、柱を立てるのに時間がかかり過ぎてレポートがなかなか進みませんでした。何回も書いていくうちに自然と柱を立てられるようになりました。それからは柱を立てることによってレポートなどが速く書けて、スピーチをする時も立てた柱の構成を覚えて話せば、言いたかったことを忘れてしまってもなんとか続けることができました。3つ目は、読むスピーチから伝えるスピーチにできたことです。

初めの頃は、全部暗記して覚えたことをそのまま話すだけでした。しかし、バッカーズに入塾して色々な先生方のお話から、身ぶり手ぶりを入れて話すと相手に伝わりやすいことや、相手の目を見て話し、相手に伝えようという気持ちで話すとその気持ちが伝わることを教わりました。私はそのことを実践し、少しずつ伝えるスピーチにすることができました。まだ上手に身ぶり手ぶりを入れることはできないけれど、相手に伝えるスピーチにすることはできたと思います。

3つ目は、今の生活がすごくありがたいと感じたことです。今年は新型コロナウイルスの影響で、学校やバッカーズにも行けないという状況が続きました。外出することもできず、今までの当たり前が当たり前ではなくなりました。家にずっとこもって勉強したり本を読んだりしていましたが、勉強をされていて分からないことがあっても先生がいないため、教えてもらうことができませんでした。また、友達とも会えないため、遊ぶことも話すこともできませんでした。しかし、このようなことを経験することで、周りに人がいてくれるというありがたさや、周りの人の大切さを実感することができました。それと同時に、世界には学校に行きたくても行けない、学びたくても学べない子ども達がたくさんいるのに、恵まれた環境の中で甘えている私がとても恥ずかしく思えました。これからは、今日しかない1日をより良くするために、毎日を大切に過ごしていこうと考えています。

※以下省略

(中1⇒中2)

バッカーズ寺子屋に入塾して

私はバッカーズに入塾して、将来生きていく中で重要な経験を、毎回の講座でさせて頂きました。バッカーズでの経験は、一生忘れることのない学びであり、私の大きな自信につながりました。その中で特に心に響いたことが、2つあります。

1つ目は、志を立てるということです。このことは、企業訪問や経営者講話で、毎回大切さを感じました。私は、バッカーズに入塾するまで、“夢”と“志”の違いや、“志”という言葉の意味を知りませんでした。ですが、バッカーズの支援者の方々の未来について真剣に考えている目や、志があったからこそ成功できたというお話を見たり聞いたりしているうちに、「早く志を立てよう」と思うようになりました。私はまだ志を立てていないのですが、たくさんの人の役に立つ人になりたいと思っています。私は、志をたてるためにまず、世界の動きについて知ることが大切だと思います。バッカーズでは、講座の最初に新聞を読むことが多くありました。私はそこで読む新聞の出来事を、ほぼ知らず驚くばかりでした。塾長が毎回「新聞を読むことは大切です」とおっしゃっていて、正直少し面倒だとは思っていましたが、私も新聞を読み始めました。新聞を読んでいると、知らなかったニュースを知ることができ、新たな気づきもありました。そして、色々なことに興味を持てるようになりました。例えば、異国との文化の違いです。私は新聞で見て興味を持ちました。だから岩本さん（福岡成蹊学園理事長）の経営者講話のときの、留学のお話はとても興味深い内容でした。バッカーズに入る前は「留学って何の為にあるのだろうか？」と思っていました。ですがこのお話で、「絶対に留学したい！」と思うようになりました。だから、新聞を読んでいると異国についての記事があるときは、チェックするようになりました。さらにあらゆることについて、広い視野で考えることが少しずつ出来るようになりました。色々なことに興味を持つと、その中から自分の本当にやりたいこと、つまり志が見えてくると思います。私は、世の中のことを知り、じっくりと考え、一生をかけて貫き通す志を立てていきます。

2つ目は、失敗を学ばせてくれる環境のありがたさです。入塾したとき、塾長が「バッカーズでは、大いに失敗してください。人はだれでも失敗します。失敗して、大いに学べばいいのです。」とおっしゃっていました。私はその言葉にとっても驚きました。学校では絶対に言われることのない言葉だったからです。私は忘れ物をしたり、遅刻をしたりと何度も失敗をしてしまいました。「支援者の方々や塾長、スタッフの方々が一生懸命用意くださった貴重な講座を、私は自分のミスのせいで無駄にしてしまった。どうしよう・・・」と思っていても、いつも塾長やスタッフの方々はにこやかに対応してくださいました。これが学校だったら、「なぜこんなことになったのですか。反省しなさい。」と注意されます。バッカーズでは、たくさんの企業訪問や合宿があります。ですが、事前の諸注意はあまりありません。一方、学校で社会科見学や修学旅行があるときは、30分もの諸注意があります。ですが内容は同じようなことを繰り返し言われるだけです。私はバッカーズと学校の失敗の受け止め方の違いに気づきました。このことから私は、塾長や支援して下さる方が私のことを心から信じてくれているのだということ強く感じました。バッカーズの失敗できる環境から、失敗からもたくさんのことを学べることに気づきました。私は、バッカーズで失敗させていただいて、確認することの大切さや、時間の大切さを学びました。これからもこの学びを生かして、たくさんのことに挑戦し「失敗」という経験を積み重ね、大きく成長していきます。

私はこの“バッカーズ九州寺子屋”という真剣な学びの場に入塾することができて、本当に良かったと改めて思いました。それは心が大きく成長したからです。今、私は小学6年生です。先日、学校で委員会の委員長決めがありました。私が入っている計画委員会は、いわゆる生徒会のような学校で一番重要な委員会です。私は、バッカーズで日本のリーダーにたくさん出会い、リーダーについてたくさん学んでいました。私は最初から委員長になりたいと思っていました。委員長は、なりたいた人が立候補して多数決で決まります。そ

の際に一人一人が意気込みを言います。私はバッカーズで習ったスピーチを生かして意気込みを言いました。多数決では、たくさんの票が集まり、委員長になることができました。私が委員長になれたのは、全てバッカーズのおかげです。バッカーズに入塾する前、私は委員長になりたいと自分から思うことなど、想像していませんでした。その時の私は、“リーダー”や“長”がつくものに目を向けず、興味さえ持たない人だったからです。私は過去に、学級委員に推薦されたのに、即答で「いやです。」と答えてしまったことがあります。今それを後悔しています。バッカーズに入塾する前、「バッカーズって、スピーチとかレポートとか大変そう」と思い、あまり気が向きませんでした。ですが実際に入塾すると、今までに考えたこともなかった志や日本の未来について考えるようになり、委員長にも立候補できるようになりました。バッカーズでの学びは全て人生に生かされています。

そして、何より大切にしたいのがバッカーズで出会った 9 期生の仲間です。志を立てるために大切なことの 1 つに“師友に学ぶ”ということがあります。その場がまさにバッカーズでした。講座では毎回一人一回マイクが回ってきて考えを言う時間があります。1 つの新聞記事に対して考えを言うときもあります。ですが、色々な考えがあり、自分が考えつかない感想がほとんどでした。スピーチコンテストのときにもたくさんのことを学びました。第一回スピーチコンテストのテーマは“伝えたい感謝の言葉”で、自分が感謝を伝えたい人や物についてスピーチをしました。私は身近な両親に感謝のスピーチをしました。私はみんなも両親や家族など、“人”に感謝のスピーチをするだろうと思っていました。ですが、ランドセルや日本のきれいな水、食べ物など“物”に感謝をしている仲間がいて、物の見方、考え方の違いを学びました。

このように私は、バッカーズでかけがえのない学びを得ました。これは、塾長やスタッフの方々、支援者の会の方々や日本の将来を私たちに託してくださっているのおかげです。塾長は毎回の講座の内容を真剣に考えてくださり、スタッフの方々は、私たちが楽しめるように 26 人分の準備をしてくださり、支援者の方々は講話の内容をわかりやすく真剣に考えてくださいます。私はこれから、支援して下さる方々の想いに応える“強く明るい”人になります。そして、何事も真剣に考え、多くの人のためになるリーダーになりたいと思います。

※以下省略

(小 5⇒小 6)

バックカーズ寺子屋の一年間を振り返って（保護者）

息子は新型コロナの影響で中学の入学式も開催されず、1学期はほぼオンライン授業という時代の中、中学2年生の時期にこのバックカーズ寺子屋と出会いました。

経営者から直接お話を伺えるというバックカーズ寺子屋ならではの講座スタイルですが、前半やはり新型コロナの影響でオンライン実施となり、その上毎回レポートを書くという息子にとっては苦難があり、モチベーションを持続することはなかなか難しいのではないかと心配しました。毎年7月に開催される萩合宿も開催できず、同期生ともオンライン上で顔を合わせるだけの講話が続きました。オンラインだけでは思春期の男の子に同期生と打ち解けて仲良くなれというのも難しい注文でした。

しかし徐々に講話が対面で開催されるようになり、12月の足立美術館研修から帰ってきたときはもうすっかり仲良くなっていて、楽しそうに笑っておりほっとしました。足立美術館研修は大雪でしたが、そのせいで雪合戦ができ、各々のキャラクターがよくわかったようで、羽田空港に迎えに行ったときには改めて子どもたちの力は素晴らしいなと思うとともに、難しい時期にも関わらず足立美術館研修を実施してくださったバックカーズ寺子屋事務局の皆様本当に有り難いと感じました。

バックカーズ寺子屋ではスピーチコンテストを2回開催しますが、各合宿から飛行機を降りてすぐのタイミングにもスピーチがあります。このスピーチがとても意義があり、よい気づきのスパイスだったと私は思います。

日本でスピーチというと、書いてあることを間違いなく読んで終えるイメージがありますが、バックカーズ寺子屋ではスピーチは書いてあるものを読むべきではなく、自分の言葉で話すことを求められます。羽田空港でのスピーチは、子供たちが体験してきたことを楽しそうに心から話しており、自分の言葉で話すというスピーチの意味を実感し、基礎を築く素晴らしい機会だと感動しました。

そのうち、第2回スピーチコンテストが行われましたが、与えられたテーマを自分たちの言葉でしっかり語っており、第1回目比べて格段に上達しており、内容も面白く個性的で正直驚きました。子供たちの成長は著しいとしか言いようがありません。大人でもこんなに立派なスピーチをできる日本人は少ないと感じました。これも偏にバックカーズ寺子屋での講座において、木村塾長が常々子どもたちの意見を引き出し、きちんと自分の頭で考える習慣を植え付けてくれたおかげなのだと実感致しました。

また私が個人的に感じた子どもたちの変化の二つ目はその「目」です。保護者もまた突発的に感想を求められる機会があるのですが、私が話しているときの子どもたちの目つきも徐々に変わっていきました。私は普段人前で話す機会もありますが、聞く側の目は机の上を見ていたり、見てもぼんやりなことも多く、全く緊張することなどないのが私の経験でした。しかしバックカーズ寺子屋の子どもたちの目はすごいパワーで、卒塾式の目にはたじろぎました。これはバックカーズ寺子屋で『攻撃的に聴く』という学びのおかげだと考えます。

大人の私もこの『攻撃的に聴く』には改めてなるほどと思われました。人の話をきちんと聞いているつもりでも、『攻撃的に聴く』ことは実践できていないのではないかと、そう考え、仕事上でメモを取る姿勢と密度を変えてみました。まだまだ発展途上ですが、実際私のような大人でもこの『攻撃的に聴く』を念頭に置くだけで変化があります。『攻撃的に聴く』ことによって集中力・思考力・人間力もおのずと上がっていくことがわかります。この重要な習慣を10代の若い折に学ぶことができ、基礎構築できる機会は、特に日本の教育現場ではなかなかないことです。こうした『攻撃的に聴く』という意義を息子に実感させることができたのは、この年齢時期ということも代えがたく、彼の生涯に渡っての宝になると確信しております。

今、新型コロナ、ウクライナ情勢という激動の時代に多感な時期を迎えている子どもたちは、我々大人の想像のできないような不安を抱えているのではないかと思います。

更にインターネットの普及により、情報は溢れかえっており、何が正しいのか、自分で何を選ぶのか、いつも問われている時代とも言えます。

そんな今、バックヤーズ寺子屋で『志』という生きることを学び、ひとりの人間として胸を張って生きていくことの指針を教えていただいたことは、複雑化していく世の中でも自分を失わずに『志』について常に自己に問うていけばよいのだという地図を手に入れたようなものではないでしょうか。

また一緒に学んだ仲間たちがいることも大変心強いです。

志の先駆者である経営者の方々に学び、経営者に直に話を聞き、質問をすることによって、ぼんやり思い描いていたことの輪郭も太く濃くなったことでしょう。次は彼らの番です。いつか正しく日本を牽引していつてくれる存在になってくれればと、大きく期待します。

最後になりますが、バックヤーズ寺子屋を支えてくださっていらっしゃるファンデーションの方々、木村塾長、事務局の方々に心から感謝を伝えたいです。これからも卒業生としてよろしくお願ひいたします。

【聞く】ことの意義

1. 「聞く」は話すよりも消極的なことのように考えられがちだが、これくらい積極的な、全身、全霊をかけなければならないことはない。
2. 「学問」というようなことだって、「真理」の声を、全身全霊をかけて「聞く」こと以外にないと思う。
3. 聞くことは吸収すること、伸びること、新しい世界に生まれること。
4. 聞くということは、相手の存在を大事にすること。聞くということは、相手を理解すること。

【書く】ことの意義

1. 私たちは、その時その時いろいろなことを学んでいる。それを書いてみると、いかに無整理、無秩序にものごとを学んでいるかということがわかる。だから、書くということは、自分を整理することである。
2. 書くということは、モヤモヤしたものに形を与えることである。したがって不確かなものを確かなものにしていくことである。
3. 書くということは、経験が整理されることである。したがって、経験が生きたものになり、意味を持ったものになる。
4. 書くということは、考えるということである。したがって、自分の考えを築き上げていくことである。そして、書いている中に、その考え不足や未成熟の考えが成熟してくる。書きながら考え、考えを深め、高め、はばのある確かなものに育てあげることができる。
5. 書くということは、自分を客観化することである。自分を、自分にも人にも見えるようにしていくことである。
6. 書くということは、そのままでは消えていってしまう「感じ」や「思い」「考え」「行動」を、ひとつひとつ呼び止め、形を与え、いたわってやる仕事だ。感じっぱなし、やりっぱなしにして逃げてしまわないで、呼び止め、形を与え、いたわってやることだ。
7. 書くということは、自分を責めていくことだからつらいのはあたりまえ。
8. 書くということは、また、整理し、あいまいなことは確かめ、順序の乱れているものには順序を与え、それを自己統制していく仕事でもある。だから「書く」作業を取り入れると、子どもがしゃんとしてくる。

『東井義雄一日一言』（致知出版社）

□東井義雄（とういよしお／ぎゆう）

1912年（明治45年）4月9日 - 1991年（平成3年）4月18日）は、日本の教育者、浄土真宗僧侶。

兵庫県豊岡の浄土真宗の東光寺に生まれる。1932年（昭和7年）に姫路師範学校を卒業した。小学校教師として奉職、多くの著作を著す。東光寺住職。

昭和7年小学校の教師となり、生活綴方（つづりかた）教育運動を实践。戦後は母校の相田小学校で、かくことによる「ほんものの教育」を展開。以後、県内の小・中学校長を歴任した。平成3年4月18日死去。79歳。姫路師範卒。著作に「村を育てる学力」など。

橋本左内に学ぶ 志が立つとき

■ 橋本左内～26歳の短い生涯であった～

越前国に生まれる。嘉永2年(1849年)、大坂に出て適塾で医者緒方洪庵・杉田成卿に師事し蘭方医学を学んだ後、水戸藩の藤田東湖・薩摩藩の西郷隆盛(吉之助)と交遊。他に梅田雲浜や横井小楠らと交流する。越前・福井藩主の松平春嶽(慶永)に側近として登用され、藩医や藩校・明道館学監心得となる。

安政4年(1857年)以降、由利公正らと幕政改革に参加。14代将軍を巡る安政の將軍継嗣問題では春嶽を助け、一橋慶喜(徳川慶喜)擁立運動を展開した。幕政改革、幕藩体制は維持した上での西欧の先進技術の導入、日本とロシアの提携の必要性を説くなど開国派の思想を持ち、攘夷で揺れる幕末期では危険人物とされた。

安政6年(1859年)、春嶽が隠居謹慎処分を命ぜられた後、南紀派で大老となった井伊直弼の画策により將軍継嗣問題に介入した事が問われ小塚原刑場にて斬首。(安政の大獄)享年26歳。

■ 『啓発録』 橋本左内が15歳の頃に記したものである。

1. 稚心を去る(去稚心)

子どもじみた甘えた心を捨て去る。十三、四歳にもなって「稚心」が残っていれば、何をしていても決して上達せず、立派な人間になることなどできない。

2. 氣を振るう(振気)

負けじ魂と、恥辱を知ってそれを悔しく思う気持ちが大切である。修行を忘れ、出世を望み、遊興におぼれ、何事もまず損得を計算し、ことの是非を二の次にして大勢につく情けない人間であってはいけない。

3. 志を立てる(立志)

志の定まっていない者は、魂のない虫けら(無志)と同じで、いつまでたっても少しの向上もないが、一度志が立って目標が定まると、それからは日に日に努力を重ね成長を続けるもので、まるで芽を出した草に肥料の効いた土を与えたようになる。

凡そ志と申すは、書物にて大いに發明致し候か、或いは師友の講究に依り候か、或ひは自分艱難憂苦に迫り候か、或ひは憤發激勵致し候かの処より立ち定まり候者にて、平生安樂無事に致し居り、心のたるみ居り候時に立つ事はなし。志なき者は、魂なき虫に同じ。何時まで立ち候ても、丈ののぶる事なし。志一度相立ち候へば、それ以後は日夜おひおひ成長致し行き候者にて、萌芽の草に膏壤をあたへたるがごとし。

4. 学に勉む(勉学)

学とはならうということで、すぐれた人物の立派な行いを習い、自らもそれを実行していくことをいう。次に、勉、つとめるというのは、自己の力を出し尽くし、目的を達するまではどこまでも続けるという意味合いを含んだ文字である。何事に由らず、長い間強い意志を保ち続け、努力を重ね続けるのでなければ、目的を達成することはできない。

5. 交友を択ぶ(択交友)

交友とは自分が交際する友人のことで、択ぶとは多くの中から選び出すという意味である。自分と同じ先生について学ぶ人、同郷の人、同じくらいの年齢の人などで、自分と交際してくれる人があれば、みな友人として大切にしなければならない。しかし、友人には損友(飲み食いや遊び仲間、人格を向上させるための役には立たない)と益友(自分の過ちや気づかない点を指摘してくれ成長を促してくれる)があるので、損友を遠ざけ、益友を大切にしなければならない。

吉田松陰先生の言葉

一、「道の精なると精ならざると、業の成ると成らざるとは、志の立つと立たざるとにあるのみ」
松村文祥を送る序

(大意) 人としての生き方が正しくすぐれているかそうでないか、また、勉強などがうまくいくかいかないかは、心に目指すところがきちんと定まっているかいないかによる。

二、「学問の大禁忌は作輟なり」
講孟筭記

(大意) 学問を進める上で絶対にしてはならないことは、やったりやらなかったりということである。

三、「学は、人たる所以を学ぶなり」
松下村塾記

(大意) 学問というものは、人間とは何か、どう生きるべきかを学ぶことである。

四、「萬巻の書を読むに非ざるよりは、寧んぞ千秋の人と為るを得ん。
一己の労を軽んずるに非ざるよりは、寧んぞ兆民の安きを致すを得ん。」
松下村塾聯

(大意) 数多くの書物を読まずに、どうして千年も先まで語り継がれるような人になり得るであろうか。また、自己の苦勞を厭うような者に、どうして多くの人々の安らかな生活を築くことができようか。決してできはしない。

五、「志を立てて以て万事の源と為す」
野山獄文稿

(大意) 何事をするにも、しっかりした志(人生の目的)を立てることがすべての根本で、大切なことである。

六、「人賢愚ありと雖も各々一、二の才能なきはなし」
野山雑著

(大意) 人には、賢いと言われる人も愚かだと言われる人もあるが、誰であれ、一つや二つのすぐれた才能のない人はいないものである。

門下生 伊藤博文(初代総理大臣)、高杉晋作(奇兵隊を設立)、山県有朋(第三代総理大臣)、山田顕義(日本大学、國學院大學を設立)、他

『長州ファイブ』 幕末(1863年)に長州藩から派遣されてヨーロッパに秘密留学した五人の若者。井上馨=外交の父、遠藤謙助=大阪造幣局長、山尾庸三=東大工学部の前身を作る、伊藤博文=初代総理大臣、井上勝=鉄道の父・新橋~横浜

山内昌之氏の言葉

(東京大学名誉教授・明治大学特任教授・株式会社フジテレビジョン特任顧問・三菱商事株式会社顧問)

IBM『無限大』131より

「(略)同時に、私が松陰から学んだのは、夢と志とは違うということ。誰しも子どもの頃に、自分は将来こうなりたいといった夢を持ちます。夢のレベルは現実的なものから誇大妄想的なものまでさまざまでしょう。でも今は、能力もなければ努力もしないで、子どもの頃の夢をいつまでも追っていたり、やりたいことが分からないから自分探しの旅に出るとか、とりあえずフリーターをすとか言っている。松陰に言わせれば、それは夢の段階に留まっているからであって、人は成長する過程で夢を志に変えないといけないんですね。自分の力を見定め、力が足りなければ、それを自覚し補うことによって夢を実現させる、それが志だと松陰は言うんです。今の教育は、大きな夢を持つと言うだけで、肝心の志を教えない。特に小中学生がそう。SMAPの歌にもあるでしょ。『世界に一つだけの花』だったかな、ナンバーワンにならなくてもいい、だってもともとオンリーワンで特別なだからってというのが。いいところを突いているけど、それだけで大人になっていくわけにはいかない。たった一つであることを世の中でどう生かすか。その地点まで自分を高めていく、それが志なんですよね。松陰は若者たちに夢を持つことと同時に、現実の中でどう自分を高め、その夢を実現していく志のあり方を問い掛けることで彼らを育てていった。偉い人だったなと思いますね。(後略)」

■歴史・・・命の連続

1人	2000年	生まれ	(平成12年)		
2人	1970年	生まれ	(昭和45年)	1970年	万国博
4人	1940年	生まれ	(昭和15年)	1940年	日独伊三国軍事同盟
8人	1910年	生まれ	(明治43年)	1910年	日韓併合。大逆事件。
16人	1880年	生まれ	(明治13年)	1880年	自由民権運動激化
32人	1850年	生まれ	(嘉永3年)	1853年	ペリーの来航
64人	1820年	生まれ	(文政3年)	1819年	小林一茶「おらが春」
128人	1790年	生まれ	(天明10年)	1787年	寛政の改革
256人	1760年	生まれ	(宝暦10年)	1760年	賀茂真淵「万葉考」
512人	1730年	生まれ	(享保14年)	1716年	享保の改革
1024人	1700年	生まれ	(元禄13年)	1703年	近松門左衛門「曾根崎心中」

自分の人生を大切にすることは、自分自身の生の由来を知ることと深く関わっている。私たちの命は、決して自分一人だけのものではなく、祖先から受け継いだ「命のバトン」である。自分自身の生の由来は、生命の連続性、つまり「歴史」の中にある。

その意味で、自国と他国の歴史を温かい眼で見るとは、自分の祖先たちの命や人生を温かい眼で見つめることである。このことが、私たちが自分自身の人生と真摯に向きあって生きていくための第一歩となる。

私たちはなぜかしら、そして、いつの間にか、歴史を「生命の連続」としてとらえる眼を失ってきたようである。歴史は決して知識の断片でも、他人事でもない。

そのような歴史への暖かい眼差しこそが、私たちに存在の意味を気づかせてくれ、虚無感からも救ってくれるはずである。

また、感謝と思いやりに満ちた人生への扉を開いてくれるものとなるはずである。

東井義雄先生の言葉

1. 志が確立して、体力も能力もその本来の光を放ち始める。
2. 志があいまいなものである間は、その人間に転換を与えるものにはならない。
3. 志を立てるということは、生活現実にも密着した決断である。それは、生き方、何を旨としてどのように生きるかという現実との取り組みが問題となる。それができると「僕の十年先を見ていてください」ということにもなるだろう。
4. 志を立てるのに大きな教育力になるのは、親や教師の現実への取り組み方、生き方である。

.....

1. 学校教育の成果が一番はっきりあらわれてくるのは、子どもが、教師の手を離れ、家庭に帰ってからのあり方ではないかと思う。子どもが教師の手を離れ、家庭に帰ってからのあり方が変わってこないようだったら、学校教育はほんものではない、ということだ、と思うのだ。
2. 「近道」はやはり「近道」であり、「本道」はやはり「本道」である。「ほんとうでないもの」はやはり「ほんとうではない」。「にせもの」はやはり「にせもの」である。
3. 「ほんもの」と「にせもの」は見えないところの在り方で決まる。それなのに「にせもの」に限って、見るとこばかりを気にし、飾り、ますます「ほんとうのにせもの」になっていく。
4. 見えないところが見えるところを支えている。見えないところが本物にならないと、見えるところも本物にならない。
5. あたりまえのことは、実は素晴らしくて、難しいことだ。
6. 心を込めた仕事は生きている。床の上にこぼれたバケツの水の飛びしずくを、あなたがいてねいにふいてくれたことだって、ちゃんと私の心の中に生きている。
7. 尊いもの、美しいもの、善なるもの、みんな謙虚の人のところへ集まってきてその人のものとなる。
8. 「させられる仕事」から「する仕事」に変わるとき、苦しみは喜びに変わり、生きがいに眼を輝かせる。
9. 根気、根性、性根、それが人間を決定する。
10. 根の深さと広がり、樹の高さと広がりになる。
11. 根を養えば、樹はおのずから育つ。
12. 私たちお互いの中でも、素直になりさえすれば、もっともっと自分を育てることができのではないのでしょうか。かたくなな「意地」や「自尊心」をかなぐり捨てて、学び合う構えがもてたら、この学校の中だけでも、さわやかな風が通い合い、私たちの目指している「共同経営」だって、もっとスケールの大きい気持ちのいいものに成長するのではないのでしょうか。

『東井義雄一日一言』（致知出版社）

森信三先生の言葉（『修身教授録 第34講』より）

※森信三先生が、教師を志す大学生たちに話した講義録。

すなわち真の教育というものは、単に教科書を型通りに授けるだけにとどまらないで、すすんで相手の眠っている魂をゆり動かし、これと呼び醒ますところまで行かねばならぬのです。すなわち、それまではただぼんやりと過ごしてきた生徒が、はっきりと心の目を見ひらいて、足どり確かに、自分の道を歩み出すという現象が起こって来なくてはならないのです。

しかしながら、このように相手の魂をその根本から揺り動かして目を醒ますためには、どうしてもまず教師その人に、それだけの信念の力がなければならぬでしょう。すなわち生徒たちがその眠りから覚めて、自ら起って自分の道を歩み出すためには、まず教師自身が、全力を挙げて自分の道を歩まねばならぬでしょう。

教育がいわゆる型通りの紋切のものに終わって、相手の心に迫る力を持たないということは、実は教師自身が、一つの型にはまりこんで、その活力を失った結果というべきでしょう。実際はわが国の教育で、現在何が一番欠けているかと言えば、それは制度でもなければ設備でもなく、実に人的要素としての教師の自覚いかなの問題だと言うべきでしょう。

もちろん問題は、ひとり教師の側のみにとどまらず、生徒の側から言っても、現在の学校制度では、生徒が教師を尊敬する点においても、大いに欠けていることは事実です。しかしながらこの問題も、教師の立場からはやはり一切の責任は、教師としての自分にあるとしなければならぬでしょう。

かくして今日教育の無力性は、これを他の方面から申せば結局「志」という根本の眼目が欠けているということでしょう。なるほどいろいろな学科を型どおりに習いはするし、また型どおりに試験も受けてはいます。しかし肝腎の主人公たる魂そのものは眠っていて、何ら起ち上がろうとはしないのです。

というのも志とは、これまでぼんやりと眠っていた一人の人間が、急に眼を見ひらいて起ち上がり、自己の道を歩き出すということだからです。今日わが国の教育上最も大きな欠陥は、結局生徒たちに、このような「志」が与えられていない点にあると言えるでしょう。

何年、否何十年も学校に通いながら、生徒たちの魂は、ついにその眠りから醒めないままで、学校を卒業するのが、大部分という有様です。

ですから、現在の学校教育は、まるで麻酔薬で眠りに陥っている人間に、相手かまわず、やたらに食物を食わせようとしているようなものです。人間は眠りから醒めれば、起つなと言っても起ち上がり、歩くなと言っても歩き出さずにはいないものです。食物にしても、食うなと言っても貪り食わずにはいられなくなるのです。

しかるに今日の学校教育では、生徒はいつまでも眠っている。ところが、生徒たちの魂が眠っているとも気付かないで、色々なものを次から次へと、詰め込もうとする滑稽事をあえてしながら、しかもそれと気付かないのが、今日の教育界の実情です。それというのも私思うんですが、結局は、われわれ教師に真に志が立っていないからでしょう。すなわち、われわれ自身が、真に自分の生涯を貫く終生の目標というものを持たないからだと思うのです。

すなわちこの二度とない人生を、教師として生きる外ない運命に対して、真の志というものが立っていないところに、一切の根元があると思うのです。しかしそんなことで、どうして生徒たちに「志」を起こさすことができましょう。それはちやうど、火のついていない炬火で、沢山の炬火に火をつけようとするようなもので、始めからできることではないのです。

下村湖人の言葉

■下村 湖人（しもむら こじん、1884年（明治17年）10月3日 - 1955年（昭和30年）4月20日）は、日本の小説家・社会教育家。本名は下村 虎六郎（しもむら ころくろう）、旧姓は内田（うちだ）。

佐賀県神埼郡千歳村大字崎村（現神崎市千代田町崎村）出身。東京帝国大学英文科卒。大学卒業後に母校佐賀中学校教師や鹿島中学校校長等を歴任。教職辞任後は、同郷で高校・大学同窓の田澤義鋪に従い、講演や文筆活動で社会教育に尽力。青少年に影響を与えた『次郎物語』の著者として知られる。

1. 「子供に何か話しかけられるのを面倒くさがる親ほど、根気よく子供に絶望の習慣を養っている親はない。」
2. 「他人が非難されているのを痛快がる人ほど、自分が他人から非難されるのを気に病むものであり、他人に対して傲慢な人ほど、他人か自分に対して傲慢であることをいやがるものである。」
3. 「よき親でありたいと願う人々のために、私の用意している助言がただ一つある。それは、子供をその善悪に拘わらず常にいたわってやるということである。むろんそれは単なる技術であってはならない。それは、人間共通の弱点について十分な知識を持ち、自分自身そうした弱点の持ち主であることを深く自覚するところから、自然に発散される感情の香気でなければならない。愛撫や、賞賛や、叱責や、教訓や、その他親としての一切の努めは、そうした感情の香気に包まれてのみ真に生かされるであろう。
この助言は、だから、つぎのようにいいかえることもできる。人間性に無知な親は親ではない。人間として傲慢な親は親ではない。自己をいつわる親は親ではない。親もまた子供と共に人生不断の修行者でなければならないのだと。」
4. 「子供は大人のまねをする。このことを大人が忘れさえしなければ、子供の教育はさほど困難なことではない。しかるに、世の大人たちは、ご苦労にも、子供たちに自分のまねをさせまいとして、いつも苦労し、それを教育だと思いちがいでいるかのようである。」
5. 「子どもというものは、親に本当に信用されているという自信があると、めったにうそを言ったり、かくれて悪事を働いたりもしないものである。また、自分が興味をもっていることに、親も興味をもっているということがわかると、行動が生き活きとして来るし、年齢相当に能力が認められ、それにふさわしい責任が与えられると、大抵の困難に打ち克ってそれを果たすことができるものなのである。
このことは、世の親たちに次のことを教える。それは、子どもをいかに教育するかを考える前に、子どもをいかに遇するかを考えなければならないということである。」
6. 「甘い教育によって、いろいろの自由を与えられた子供たちは、将来最も不自由な人間に育つであろう。なぜなら、彼らは、自由の最大の基盤である反省力と意力がと奪われるであろうから。」
7. 「一粒の米や、一滴の水を大切にす倫理の滅びて行く時代には、行き届いた愛情も、緻密な計画心も、厳しい責任感も、育たない。およそ磨きのかかった人間の魂というものは、小さなものに対する畏敬の念のないところには、決して育つものではないのである。」

『心窓去来』